

その 26

万葉ファンタジア

大仏開眼会



乞食者(ほかひひと)の詠(うた)

「押し照るや 難波の小江(をえ)に 廬(いほ)作り 隠(なまり)て居る

葦蟹を 大君召すと 何せむに 吾を召すらめや

明(あき)らけく 吾は知ることを 歌人と 我を召すらめや

笛吹きと 我を召すらめや 琴弾きと 我を召すらめや

かもかくも 命受けむと 今日今日と 明日香に至り

置かねども 置勿(おくな)に至り つかねども 都久野(つくの)に至り

東(ひむがし)の 中の御門ゆ 参り来て 命(みこと)受くれば

馬にこそ 絆(ふもだし)掛くもの 牛にこそ 鼻繩はくれ

あしひきの この片山の 百榆(もむにれ)を 五百枝(いほえ)剥き垂り

天照るや 日(ひ)の異(け)に干し さひづるや 柄白(からうす)に搗き

庭に立つ 碓子(すりうす)に舂き 押し照るや 難波の小江の

初垂(はつたり)を 辛く垂り来て 陶人(すゑひと)の 作れる瓶(かめ)を

今日行きて 明日取り持ち来 我が目らに 塩塗り給ひ

きたひはやすも きたひはやすも

右の歌一首は、蟹の為に痛を述べてよめり」

(難波の江に庵を作って隠れ住んでいるこの蟹の私を、帝がお召しになる。何のためだろうか、歌人としてだろうか、笛吹きとしてだろうか、それとも琴弾きとしてだろうか。とにかく仰せを承ろうと、飛鳥にはせつけ、置勿に至り、都久野に至り、中門から入って承れば、何と意に反して、馬に使う絆を掛けられ、牛に使う鼻繩をくれられ、榆の枝でくられて、天日に干された拳句、臼でつかれてしまった。陶人の作った瓶に私を入れると、私に塩を塗って食べようとなされる。食べようとなされる)

作者未詳(巻 16・3886)

万葉集巻 16 には、乞食者の歌 2 首として、鹿と蟹のために、それぞれ人間たちに食われることの痛みを詠った珍しい歌がある（巻 16・3885～6）。冒頭の歌は、蟹の歌で、歌の調子からして、ただ歌われるだけでなく、面白おかしい所作を加えて演じられたのではないかと思われる。乞食者（ほかひひと＝ほかいびと）とは文字通りの乞食という意味ではなく、芸を売る見返りに食を得ていた、芸能民の類だろうというのが通説である。

さて、当代一の大事業東大寺の廬舎那仏、つまり、東大寺大仏の建立である。当時、鬼病と呼んで怖れられた疫病の大流行、今でいうパンデミックやそれによる飢饉等のため大和の民は困苦にあえいでいた。この未曾有の事態を乗り越えようと苦闘したのが聖武（しょうむ）天皇だった。仏教の教えを取り入れた国造りを進め、全国各地に国分寺、国分尼寺を設置、いくつかの社会改革に取り組む一方、5 年間に 3 回もの遷都を行った。こうした社会不安を取り除き、国家の安泰を願って、聖武天皇は、天平 15（743）年、大仏の造立を発願した。それから約 10 年後の天平勝宝 4（752）年、まだ完成には至っていなかったが、大仏の開眼供養会が大々的に行われた。最終的に完成を見たのは、宝亀（771）年という長期間にわたった、まさに当代一の大事業だった。聖武天皇は、すでに 4 年前の天平勝宝元年に退位し上皇となり、女帝孝謙天皇の時代になっていた。開眼会（かいげんえ）には、その孝謙天皇、聖武上皇、光明（こうみょう）皇太后を初めとする要人や文武百官が列席し、参列者は 1 万数千人に及んだという。境内では、終日わが国のみならず、唐、高麗の楽人・舞人らによる伎楽や楽舞が華やかさを競うように次々に演じられ、仏法伝来以降、初めての盛大な齋会（さいえ）となった、という。

一方、大伴家持は、その前年、4 年に及んだ越中守の任を終え、少納言に昇進して、朝廷の事務を取り扱う信部大輔（しんぶたゆう）に就いていたので、間違いなく、この開眼会には参列していたはずである。しかし、大仏に塗金する黄金が陸奥国に出たことを「感謝」し、年号をその年だけ、天平感宝元年に替えた天平勝宝元年に、「出金を寿ぐ歌」を詠んだだけで、その後、開眼会を含め、大仏に関わる歌は 1 首も詠むことはなかった。そして、その後も、大仏にまつわる歌を集めて、万葉集に載せるなど、することはなかった。

万葉集には詠われることのなかった大仏開眼会は、どのような「齋会の儀」だったのだろう。境内の催しもの他に、街なかでは、乞食者の見世物なども行われていた違いはない。万葉ファンタジアとして再現してみる。



(東大寺の参道。大仏開眼会に参列する人々が列をなして通り過ぎて行く。広い参道の両側には様々な屋台が並び、その一郭では、蟹のかぶり物をした 2 人の乞食者が、大声で謡い、身振り手振り、滑稽な所作をして踊っているが、足を止めて見物する人はほとんどいない)

「押し照るや」、「押し照るや」、「難波の海に廬 (いおり) 作って隠れ住む」、「廬作って隠れ住む」、「蘆蟹 (あしがに) こと、このカニ様を、なんと、なんと、」、「なんと、なんと、なにせんに」、「帝がお召しになったとき」、「なんでお召しになったのか」、「帝の御前で何をする」、「歌詠いで召されるはずはない」、「笛を吹くのでお召しも、琴を弾くのでお召しかかえのわけもない」、「かくも、かくも」、「かくも、かくも、かもかくも、お言葉とあらば、仰せのとおり飛鳥の宮に馳せつけて、門 (かど) から入りてたまわれば、なんと、なんと」、「なんと、なんと」、「馬の紐を掛けられて、牛の鼻縄でくられて、楡の枝に吊るされて、天日に干されて、拳句の果ては」、「拳句の果ては?」、「臼でつかれてしまったよ」、「臼でつかれてしまったよ」、「それから瓶 (かめ) に入れられ、目には塩を塗られて」、「瓶に入れられ、目には塩?」、「ご賞味しようと、ご賞味しようとされるよ」、「お助けあれー!」。

(人の流れも少なくなり、彼らのパフォーマンスには誰も目もくれない。嫌気がさした 2 人は、踊りをやめてぼやく)

「なんと、なんと、みんなどこへ行った?」

「なんと、なんと、なにせんに、人通りが少なくなって、わしらに施しをくれるものもいなくなった」

「今日はお寺で大きな式があるようじゃ」

「大きな式?」

「何やら、仏様に御霊 (みたま) を入れるそうじゃ」

「御霊?」

「めったに見られるものじゃないと言うぞ」

「なんだい、なんだい、その御霊ってのは?」

「さあ、いったいなにを入れるものやら、わしにも分からぬ」

「それで、みんな、その式とやらを見に行ったのか?」

「どうやら、そうらしい」

「かくも、かくも、施しもないことだし、わしらも見に行くか?」

「かくも、かくも、かもかくも、確かに、その通り……施しはないようじゃ。なら、そうするとしよう」

(乞食者は、かぶり物を片付け、わずかばかりの施しを収めて、参道の人の流れの後ろを追って、境内にもぐり込んだ。境内のあちこちに舞台が詠えられ、楽人や舞人たちが歌い踊っていた)

「なんと、なんと、人でいっぱいじゃ」



乞食者役(戸谷昌弘さんと加藤記生さん)

「なんと、なんと、なにせんに、あちらでもこちらでも、琴
や笛が鳴り、大歌女（おおうため）や大御舞（おお
みまい）たちが、歌い舞っておる」

「あの伎楽の面はどうじゃ！われの蟹や鹿の面と違って
見事なものじゃ」

「あの舞いは、唐国の踊りじゃろう」

「取り巻いて見る人で、お寺の境内が埋まっておる」

「それになんじゃ、あの坊さんたちは！お坊さんだけで、大きなお寺がいっぱいじゃ」

「おお、あれは！」

「どうした？」

「あれは、なんじゃ！五色の幡（はた）や幟（のぼり）の向こうに見えるのは……」

「かくも、かくも、お顔じゃ、それも大きなお顔じゃ」

「かくも、かくも、かもかくも、まことに、大きなお姿じゃ」

「なんとも、もったいないことよ」

「お座りになった仏様、大仏様じゃ！」

「なんとも、尊い大仏様よ」

「お坊さんたちのお祈りの声が、さらに高くなってきた」

（と、その時、参列者の間から口々に声が上がった）

「おお、おお、見ろよ、見ろ、見ろ！」

「なんじゃ、なんじゃ」

「なにやら、いちばん偉いお坊様が、大きな筆をもって、高い台座に登って行ったぞ」

「なんと、なんと、筆には、長い長い紐がついておる」

「どこまで続くのじゃ、あの紐は？」

「その紐の端を、何人ものお偉い人たちが持っている
ようじゃ」

「おお、おお、お坊様が、筆を入れたぞ！」

（参列者の間からどよめきの声上がる）

「ああ、眼じゃ！」

「そう、眼じゃ。大仏様の眼が入ったのじゃ」

「かくも、かくも、御霊を入れるとは、このことかあ」

「かくも、かくも、尊い大仏様に御霊が入ったのじゃ！」



言霊 インドの僧、菩提遷那（ぼだいせんな）が、大きな筆をもって足場にのぼり、その筆の緒を、孝謙天皇、聖武上皇、光明皇太后などが握られます。その緒は、大仏開眼縷（る）と呼ばれ、その長さは190メートルにも達しました。インドや中国から1千人の僧侶が招かれ、日本各地から集まった僧侶と合わせるとおよそ1万人となったそうであるから、それを取り巻く人々の数たるや、さすがに東大寺の広い境内も溢れんばかりだったようにございます。



大仏開眼筆



大仏開眼縷(ともに正倉院宝物)

開眼の際に使用した開眼筆や墨、筆に結び付けられた紐である開眼縷（る）、当日大仏に奉納された伎楽に使用された面などは、正倉院宝物として現存している。

開眼会が終わると、あろうことか、孝謙女帝は、藤原仲麻呂の私邸田村第（てい）に立ち寄り、そのまま御在所とされてしまったのである。その後、田村宮とも呼ばれるようになった。

女帝の治世は、藤原氏出身の光明皇太后が後見し、皇后宮を改組した紫微中台の長官に、皇太后の甥、つまり女帝の従弟にあたる仲麻呂を就け、藤原一族の勢力が急速に拡大した。田村第を天皇の在所としたのも、仲麻呂の権勢を世間に見せつけるためだったのだろう。

そして、朝廷の内部は不穏な空気に包まれ、藤原氏に反発する左大臣橘諸兄との間で権力の座を巡ってなにやら魑魅魍魎が蠢き、内乱の気配が漂い始める。神代の昔から天皇を守って来た大伴家の氏上家持は、かつて内舎人（うどねり）として仕えた聖武上皇や左大臣橘諸兄の庇護を受けてきたのだが、自らのおかれた状況がきわめて厳しいものになっていることを思い知らされる。かくして、名門大伴家は、これまでにない危機を迎え、以後没落の道をたどることになる。

聖武天皇が発願した大仏建立の功績も仲麻呂のものになり、というより、発願したのも仲麻呂だった、という噂まで立ち、家持は、大仏開眼会の晴れがましい気分につかることはできなかったはずである。

そのため、この盛大な開眼法要をお祝いする歌や大仏の完成を寿ぐ歌を、万葉集には1首たりとも残すことはしなかったのだろう。

